

●水都大阪ビジョン(2020年策定)

世界に類をみない第一級の水都の創造とともに、
住まう人・携わる人・訪れる人を笑顔に

- ・歴史と文化に培われた水都大阪を次世代につなぐ
- ・世界の多くの人々が水都といえ大阪を思い起こす魅力あるにぎわい空間の創出
- ・安全・安心で環境と共生する持続可能な水都大阪の確立

●5つの基本コンセプト

- (1) 水辺・水上観光メニューの拡大
- (2) 舟運のさらなる活性化を推進(水の回廊を中心に)
- (3) 安全・安心な水都大阪
- (4) 民間ビジネスの創出
- (5) ブランディングの強化

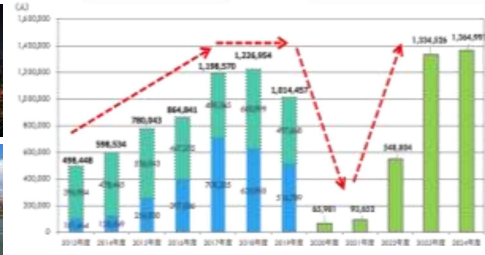
●2021年～2025年の取組みの成果

・コロナ禍によるダメージを受けながらも、大阪・関西万博に向けた機運の高まりとともに、水都大阪ビジョンに基づいて取組みを進め、船着場の開設などのハード整備や、水と光のウォーターショー、橋梁部のライトアップ、万博航路の促進など、新たな水辺の魅力が創出されてきた。

水辺の施設・設備がより充実

国内外に向けた幅広い魅力発信

コロナ禍を乗り越えて
舟運利用が回復・増加



2013年度から2024年度の舟運利用者数
※水都大阪コンソーシアム調べ

●ビジョン改定の方向性

・新型コロナウイルス感染症の拡大により一時落ち込んだインバウンドも、2024年には約3,686万人と過去最高を記録。2030年には、政府が掲げる「訪日外国人旅行者数6,000万人時代」を迎える。

・水都大阪でも、安全・安心で快適に過ごすことができる、持続可能な観光の実現が求められている。

・万博の理念「いのち輝く未来社会のデザイン」を継承しながら、2030年の大阪IR開業、2031年のなにわ筋線の開通による国内外からの人の流れの変化に対応し、大阪を世界でもユニークな持続可能な水の都として磨き上げ、次世代につないでいくことを目指し、現行の水都大阪ビジョンを改定する。



ビジョン

持続可能な共創の水辺 水都大阪

2025年大阪・関西万博の理念を継承し、水辺を多様な文化や考えを受容・尊重する共創の舞台として、ユニークなチャレンジを次々と生み出し、水と光の首都大阪にふさわしい価値を醸成していく。

ミッション

I 歴史文化を受け継ぐ

まちの人々が共創し
水辺の発展を支えてきた
歴史を継承することによって
シビックプライドを醸成する



II 水都大阪ならではの 魅力向上

大阪の独自性や
万博レガシー等を活用して
水辺を魅力アップし
水都大阪のブランドを高める



III 安全で快適な 水辺環境づくり

築き上げてきた安全・安心と
環境を維持向上し
水都大阪のブランドを支える



アクション

アクション (1) 水都大阪ならではの
ブランディング・魅力発信

アクション (2) 舟運の活性化と水辺
エリアの魅力向上

アクション (3) 水辺の安全と環境を
守る取組みの推進

アクション (4) 水辺のシンクタンク機能
の強化

アクション (5) プラットフォーム機能
の強化

●取組み範囲

水の回廊を中心としながら、東西軸と水の回廊の結節点を重点エリアとして取組む。

- 重点エリア：結節点となり
ハード整備が進展するエリア
- 連携エリア：時機をとらえて
連携を検討するエリア



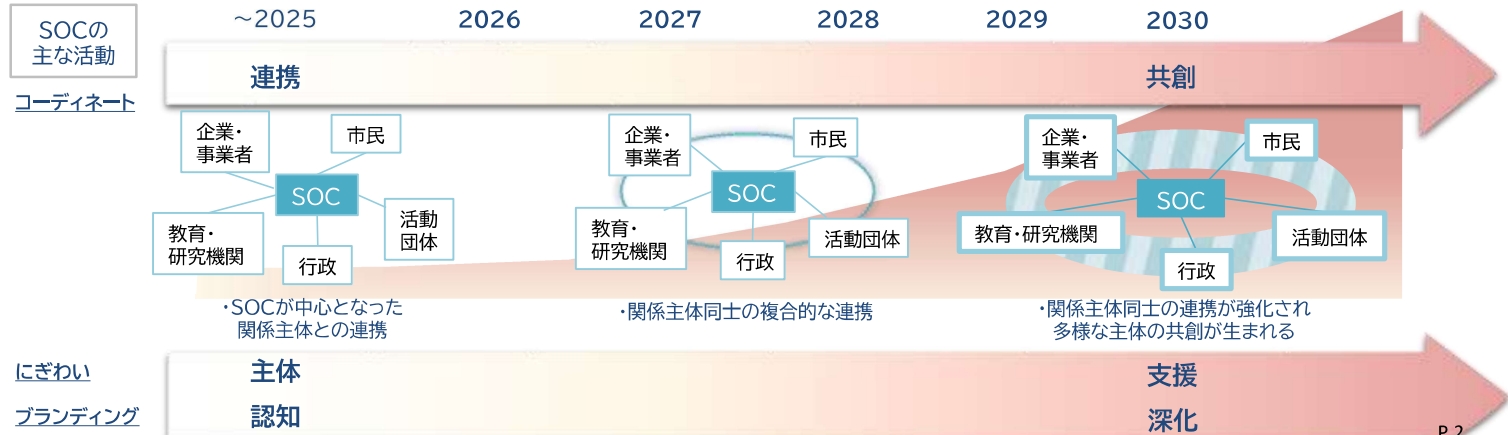
● アクション

	2026~2030年 取組方針と主な取組み	目指す状態
アクション (1) 水都大阪ならではの ブランディング・魅力発信	① 水都大阪ならではのブランディング ・水都大阪全体の世界におけるポジショニングやエリア特性の把握 ・水都大阪全体のブランド戦略検討と定期的なブランド力調査の実施 ② 世界における水都大阪の認知度向上 ・水都国際会議(仮称)等の実施・参画 ・水都関連のMICEの誘致 ③ 多様な魅力の再編集と発信 ・船着場・水辺への誘導強化(船着場案内幕の更新、鉄道等との連携、ライトアップ等)	「水都」といえば大阪が想起されることが国内外に浸透している
アクション (2) 舟運の活性化と 水辺エリアの魅力向上	① 水都大阪ならではの舟運の取組み ・ナイトクルーズなど舟運の活性化に向けた取組み ・新たな観光商品造成の促進 ② 舟運や水辺を活用した回遊性の向上 <連携事業> ・水都大阪の回遊性向上に向けたハード整備との連携 ③ ブランド強化に向けたエリアのにぎわいづくり ・ブランド戦略と連携した取組みの実施 ・水の回廊における回遊型のにぎわいづくり	水辺の拠点とその周辺エリア、水辺の拠点同士の連携が強化され、水都大阪の魅力を巡る回遊性が向上している
アクション (3) 水辺の安全と環境を守る 取組みの推進	① 水辺環境活動への企業・市民の参加促進 <連携事業> ・水辺の環境活動への企業・市民参加の促進 ・学校連携による環境学習の実施 ② 船・水辺の安全・安心の普及振興 <連携事業> ・関係機関と連携した、水辺の見守りを強化する取組み	水辺の環境や船の安全への意識が高まり、水辺の快適性が向上している
アクション (4) 水辺のシンクタンク機能の強化	① 公民連携ならではの調査・研究・アーカイブ ・大阪府・市・経済産業省等の統計データなど関連データの収集・分析 ② 評価軸の設定 ・水都大阪の取組みの方向性を定め、進捗を測るための評価軸の検討 ・評価軸づくり・年度ごとの事業レビューにおける専門家との連携	水都大阪に関わる情報が整備されることで、水都大阪の状況が広く共有され、関係者の理解が深まっている
アクション (5) プラットフォーム機能の強化	① 水辺の事業・活動の共創 ・効果的な共創の場づくりの検討 ・エリアが主体となった水辺の活動の支援 ② 水都大阪のファンづくり ・多様な対象に向けた水都大阪の魅力発信 ・学校や他地域との連携 ③ 水都大阪にまつわる相談窓口機能の拡充 ・水都大阪での活動や事業に関する水辺の利活用の相談対応 ・適切な事業者・行政・仕組みへの横つなぎ	水都大阪に関わる活動が多様化し、次世代のプレイヤーが活躍している

● 水都大阪コンソーシアムの5カ年のあり方

・この5年間に、これまで育まれた関係主体の活動を「連携」から「共創」させていくことをねらう。

・さらに、にぎわい創出は「主体」から「支援」へ、ブランディングは「認知」から「深化」へと移行し、2031年度以降の次のステップにつなげる。

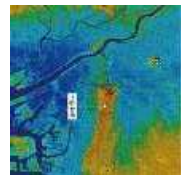


先史から1990年代まで

[先史]

海からできた大阪のまち

大阪はかつて、半島のように突き出た上町台地以外は海の底であり、縄文時代には、海水面は現在よりも1~2m高かった。



平成18年8月 デジタル標高地形図 (国土地理院ウェブサイト)

[古代]

国際交易港・難波津からなにわ八十島へ

古代、瀬戸内海に面した大阪は難波津と呼ばれ、京都や奈良の都の外港として世界とつながり、遣隋使や遣唐使も発着した。



難波往古図 河州雲蓋寺什物 (大阪市立図書館デジタルアーカイブ)

[近世]

なにわ八百八橋の繁栄

近世になると、豊臣秀吉のまちづくりをきっかけに、まちは西へ拡大。町人たちが掘った堀川がはりめぐらされ、瀬戸内海・日本海・太平洋を廻る北前船の航路とつながり、日本中から貨幣や文物が集まる経済と文化の中心地になった。



新坂大坂之図 (大阪市立図書館デジタルアーカイブ)

[近代]

大大阪の発展と地盤沈下

明治18年の大洪水をきっかけに国家事業として淀川改良工事が行われた。大阪の人口は東京を超え、大大阪と呼ばれた一方、地下水を工業用水として汲み上げすぎたことから地盤沈下が進んだ。



大阪市バノラマ図 大正13年 (川口お旅所所蔵)

[戦後]

度重なる水害への対策と水辺の喪失

第二次世界大戦で甚大な被害を受けた大阪。戦後幾度も台風に見舞われ、防潮堤や水門の整備など水害対策が進む。多くの堀川は埋め立てられ、人々の暮らしと水辺は分断、高度経済成長期には水質の悪化がピークに。



昭和23年(1948)12月30日 (国土地理院 地図・空中写真閲覧サービス)

[水都再生に向けて]

公害への取組みと水辺の再生へ

水門の建設や下水道の普及など、水質浄化に向けた一体的な取組みが進められ、1970年代の末には都心部ではきれいな川を取り戻した。また、建物が川側へ向いたり、水辺が歩けるようになるなど、かつてのような、暮らしと水辺の再生に向けて少しずつ動き出した。



21世紀からの水都大阪再生

[2001年~2016年]

第1フェーズ:水都大阪の再生

度重なる水害対策として水辺に高い護岸が整備され安全性は確保された一方で、川とまちが分断され人が近づくことができないという課題を抱えていた。

2001年から、水の都として大阪の都市再生を進めようと、内閣府の都市再生プロジェクトの採択をきっかけに、京阪中之島線・八軒家の整備やとんぼりリバーウォークなど、オール大阪で水辺のハード整備が進められ、課題解決に取り組んだ。

2009年、整備が進んだ中之島・水の回廊全体で「水都大阪2009」を開催し、市民や企業が主体的に参加する水辺の賑わいづくりの機運が高まった。2011年、河川法の規制緩和によって河川空間のオープン化がはじまると、河川区域での民設民営施設が次々とオープンし、川とまちの接点が増えていった。2015年、道頓堀川開削400周年、大阪城まちづくり400年等の節目にあたるシンボルイヤーとして「水都大阪2015」を開催。道頓堀や中之島をはじめ、中之島漁港など新たな拠点での取組みにより、にぎわいが広がっていった。



中之島 Before/After



水都大阪2009



北浜テラス



とんぼりリバークルーズ
出典:一本松海運

[2017年~2020年]

第2フェーズ:再生から成長へ

「再生から成長へ」をコンセプトに、水と光の魅力の拡大をめざして取組みを進め、目標とした舟運利用者数100万人を早期に達成。来阪インバウンドも激増。2019年には1,231万人に達したが、2020年には新型コロナウイルス感染症の拡大で一時的に舟運・観光は大きなダメージを受けた。



水都大阪クルーズマップ(英語)



万博航路チラシ

[2021年~]

第3フェーズ:持続的な成長をめざして

2021年には新型コロナウイルス感染症拡大の影響から少しずつ回復し、2024年には来阪インバウンドは1,463万人となり、新型コロナウイルス感染症拡大前を超えて成長し続けている。

2025年の大阪・関西万博を経て、2030年の「訪日外国人旅行者6,000万人・来阪外国人旅行者数2,300万人時代」に向かっている。



OSAKAリバーファンタジー
P.3

- 2001年に「水都大阪の再生」が国の都市再生プロジェクトに採択されて以降、水の回廊沿いの遊歩道や船着場の整備、橋梁や護岸等のライトアップなどのハード整備を行うとともに、規制緩和による河川空間でのにぎわい拠点の創出や、水都大阪フェス等のソフト事業を展開し、水都に相応しい水辺の魅力づくりを推進してきた。また、水都大阪の推進体制は時代により変遷し、2017年に水都大阪コンソーシアムが設立された。

年度	2001~2005	2006~2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	~																																							
社会情勢	第1フェーズ:水都大阪の再生								第2フェーズ:再生から成長へ					第3フェーズ:持続的な成長をめざして																																													
	■観光立国推進基本法施行								■来阪外客数増加					■新型コロナウイルス感染症拡大							■大阪・関西万博																																						
船着場	■大阪ドーム千代崎港 ■大阪ドーム岩崎港		■八軒家浜船着場 ■福島港(ほたるまち港)			■大阪国際会議場前港(再整備) ■大阪市中央卸売市場前港			■若松浜船着場		■本町橋船着場(本整備)		■キタハマミズム			■大阪城公共船着場(本整備)			■堂島浜船着場 ■十三船着場 ■中之島GATEターミナル																																								
規制緩和による民間整備	■とんぼりリバーウォークのイベント等社会実験開始				■川のはちけんや				■とんぼりリバーウォーク民間運営開始				■中之島LOVE CENTRAL			■TUGBOAT TAISHO			■β本町橋																																								
	■北浜テラス 川床設置開始				■中之島GATEウエスト社会実験(~2019)				■中之島公園"R"、"GARB"				■中之島GATEノース7水上レストラン			■中之島GATEサウスピア			■淀川つつみ市ミナモ十三																																								
	■河川敷地占用許可準則緩和				■河川敷地占用許可準則緩和(民間占用可能)																																																						
ライトアップ	■水晶橋(1990)	■淀屋橋	■難波橋	■中之島ガーデンブリッジ				■銚流橋	■梅檀木橋																																																		
	■大江橋	■天神橋	■錦橋	■玉江橋・堂島大橋・天満橋																																																							
	護岸ライトアップ 大川・堂島川														■阪神高速 本町橋環状線橋脚			■天保山大橋			■OSAKAリバーファンタジー																																						
公園・緑道・親水空間等	■とんぼりリバーウォーク(湊町~太左衛門橋完成)		■中之島公園(再整備)		■大阪ふれあいの水辺(桜ノ宮ビーチ)		■天満天神の森		■若松浜遊歩道		■木津川遊歩空間(トコトコダンダン)		■東横堀緑道(ランブ北側)			■東横堀緑道(本町橋北側)			■中央公会堂前広場		■東横堀緑道(本町橋~農人橋間)																																						
	■東横堀川・道頓堀川水門整備	■ほたるまち																																																									
	■平成の太閤下水完成														■中浜下水処理場 MBR・高速ろ過施設導入		■東横堀川・道頓堀川水門改修工事																																										
水都フェス等	■水都大阪2009		■水都賑わい創出プロジェクト外2010			■水都大阪2015プロジェクト			■水都大阪2015シンボルヤー			■水都大阪2015シンボルヤー			水辺のまちあそび(中之島公園水辺利活用促進)																																												
	■川の駅設置														■四季折々の水都大阪ウィーク			■東横堀川社会実験			■中之島・ウエスト冬ものがたり(ラバーダック)			■令和OSAKA天の川伝説																																			
	■大阪水辺バル														■水都大阪フェス														■平成OSAKA天の川伝説																														
舟運	■落語家と行くなにわ探検クルーズ就航														■とんぼりリバークルーズ就航														■大川さくらクルーズ就航														■アクアmini就航																
															■中之島リバークルーズ就航														■大阪城御座船就航														■水上交通の安全と振興検討委員会														■万博航路		
体制等	■「水都大阪の再生」が国の都市再生プロジェクトに採択(2001)				■水都大阪推進委員会				■水と光のまちづくり推進会議 水都大阪パートナーズ 水都大阪オーソリティ				■水と光のまちづくり推進会議 水都大阪コンソーシアム																																														
	■「水の都大阪再生協議会」「花と緑・光と水懇話会」設立(2002)														■水都大阪2009実行委員会														■水都大阪ビジョン策定																														

水都大阪ビジョン2030 (案)

2026年2月
水都大阪コンソーシアム



目次

はじめに

1. 水都大阪の歴史

2. 水都大阪のこれまでの取り組み

3. 水都大阪ビジョン2030

4. ミッション

I 歴史文化を受け継ぐ

II 水都大阪ならではの魅力向上

III 安全で快適な水辺環境づくり

5. 取り組みの範囲

6. 水都大阪の推進体制

水都大阪の再生と成長

2001年の国の都市再生プロジェクトの採択から、オール大阪による水都大阪再生の取り組みがスタートして四半世紀。「水と光の首都大阪」の実現に向けた公民連携による取り組みが継続的に進められ、水都大阪は再生・成長の段階を経て多くの方々に親しんでいただける水辺を取り戻してきた。さらに、2025年開催の大阪・関西万博に向けて、船着場の開設などのハード整備が進むとともに、水と光のウォーターショーや橋梁部のライトアップ、万博航路の促進など、新たな水辺の魅力が創出されてきた。

2030年、 訪日外国人旅行者数6,000万人時代到来へ

新型コロナウイルス感染症の拡大により一時落ち込んだインバウンドも、2024年には訪日外国人旅行者数約3,686万人と過去最高を記録し、2030年には、政府が「訪日外国人旅行者数6,000万人時代到来」を掲げている。水都大阪においても、安全・安心で快適に過ごすことができる、持続可能な観光の実現が求められている。

水都大阪ビジョン2030の策定

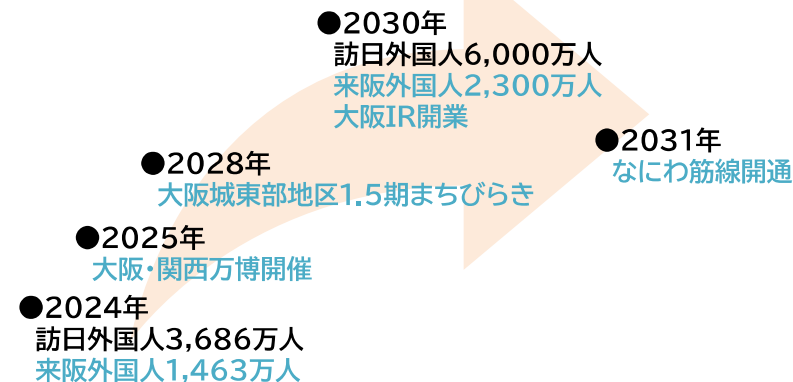
このような状況をふまえ、万博の理念「いのち輝く未来社会のデザイン」を継承しながら、2030年の統合型リゾート施設(大阪IR)開業、2031年のなにわ筋線の開通による国内外からの人の流れの変化に対応し、大阪を世界でもユニークな持続可能な水の都として磨き上げ、次世代につないでいくことを目指し、現行の水都大阪ビジョンを改定するものである。



水都大阪再生の先駆け 八軒家浜



OSAKAリバーファンタジー



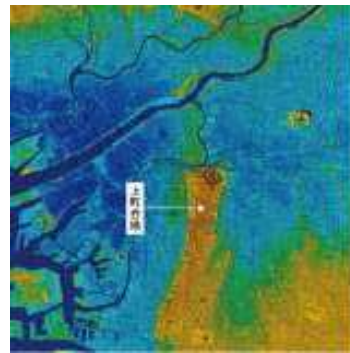
ビッグイベントと外国人旅行者数(予定)

1. 水都大阪の歴史(先史から1990年代まで)

[先史]

海からできた大阪のまち

大阪はかつて、半島のように突き出た上町台地以外は海の底であり、縄文時代には、海水面は現在よりも1~2m高かった。淀川の土砂が徐々に堆積したことから、段々と淡水化し、陸地化していった。



平成18年8月 デジタル標高地形図
(国土地理院ウェブサイト)

[古代]

国際交易港・難波津からなにわ八十島へ

古代、瀬戸内海に面した大阪は難波津と呼ばれ、京都や奈良の都の外港として世界とつながり、遣隋使や遣唐使も発着した。また砂州から島々が形成された大阪はなにわ八十島とも呼ばれ、天皇即位の神事「八十島祭」も行われていた。



難波往古図 河州雲莖寺什物
(大阪市立図書館デジタルアーカイブ)

[近世]

なにわ八百八橋の繁栄

近世になると、豊臣秀吉のまちづくりをきっかけに、まちは西へ拡大。町人たちが掘った堀川が毛細血管のようにはりめぐらされ、瀬戸内海・日本海・太平洋を廻る北前船の航路とつながり、日本中から貨幣や文物が集まる経済と文化の中心地になった。



新板大坂之図
(大阪市立図書館デジタルアーカイブ)

[近代]

大大阪の発展と地盤沈下

明治になると淀川で洪水が頻発し、明治18年の大洪水をきっかけに国家事業として淀川改良工事が行われた。併せて築港計画も進み、水運を活かした工業が発展。大阪の人口は東京を超え、大大阪と呼ばれた一方で、地下水を工業用水として汲み上げすぎたことから地盤沈下が進んでしまった。



大阪市パノラマ図 大正13年
(川口お旅所所蔵)

[戦後]

度重なる水害への対策と水辺の喪失

第二次世界大戦で甚大な被害を受けた大阪のまちは、戦後度重なる台風に見舞われ、防潮堤や水門の整備など水害対策が進められた。多くの堀川は埋め立てられ、人々の暮らしと水辺は分断、高度経済成長期には水質の悪化がピークに達した。



昭和23年(1948)12月30日
(国土地理院 地図・空中写真閲覧サービス)

[水都再生に向けて]

公害への取組みと水辺の再生へ

水質の悪化を受けて、水門の建設や下水道の普及など、水質浄化に向けた体系的な取り組みが進められ、1970年代末には都心部ではきれいな川を取り戻した。また、建物が川側へ向いたり、水辺が歩けるようになるなど、かつてのような、暮らしと水辺の再生に向けて少しずつ動き出した。



1. 水都大阪の歴史(21世紀からの水都大阪再生の流れ)

第1フェーズ:水都大阪の再生(2001年~2016年)

度重なる水害対策として水辺に高い護岸が整備され安全性は確保された一方で、川とまちが分断され人が近づくことができないという課題を抱えていた。

2001年から、水の都として大阪の都市再生を進めようと、内閣府の都市再生プロジェクトの採択をきっかけに、京阪中之島線・八軒家の整備やとんぼりリバーウォークなど、オール大阪で水辺のハード整備が進められ、課題解決に取り組んだ。

2009年、整備が進んだ中之島・水の回廊全体で「水都大阪2009」を開催し、市民や企業が主体的に参加する水辺の賑わいづくりの機運が高まった。2011年、河川法の規制緩和によって河川空間のオープン化がはじまると、河川区域での民設民営施設が次々とオープンし、川とまちの接点が増えていった。2015年、道頓堀川開削400周年、大阪城まちづくり400年等の節目にあたるシンボルイヤーとして「水都大阪2015」を開催。道頓堀や中之島をはじめ、中之島漁港など新たな拠点での取組みにより、にぎわいが広がっていった。



中之島 Before/After



水都大阪2009



北浜テラス



とんぼりリバークルーズ
出典:一本松海運



水都大阪クルーズマップ
(英語)

第2フェーズ:再生から成長へ(2017年~2020年)

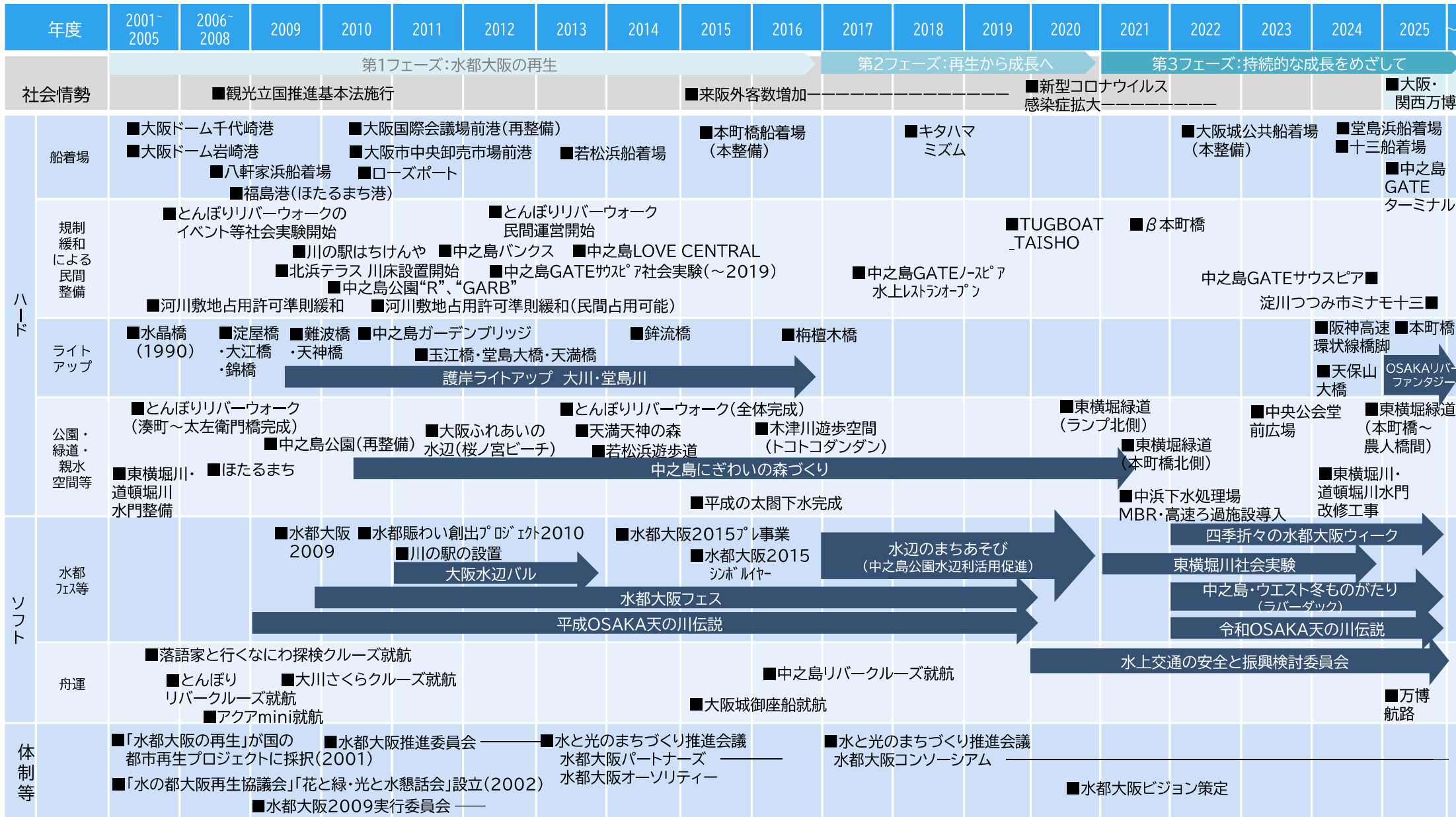
「再生から成長へ」をコンセプトに、水と光の魅力の拡大をめざして取組みを進め、目標とした舟運利用者数100万人を早期に達成。来阪インバウンドも激増。2019年には1,231万人に達したが、2020年には新型コロナウイルス感染症の拡大で一時的に舟運・観光は大きなダメージを受けた。

第3フェーズ:持続的な成長をめざして(2021年~)

2021年には新型コロナウイルス感染症拡大の影響から少しずつ回復し、2024年には来阪インバウンドは1,463万人となり、新型コロナウイルス感染症拡大前を超えて成長し続けている。2025年の大阪・関西万博を経て、2030年の「訪日外国人旅行者6,000万人・来阪外国人旅行者数2,300万人時代」に向かっている。

2. 水都大阪のこれまでの取組み

- 2001年に「水都大阪の再生」が国の都市再生プロジェクトに採択されて以降、水の回廊沿いの遊歩道や船着場の整備、橋梁や護岸等のライトアップなどのハード整備を行うとともに、規制緩和による河川空間でのにぎわい拠点の創出や、水都大阪フェス等のソフト事業を展開し、水都に相応しい水辺の魅力づくりを推進してきた。また、水都大阪の推進体制は時代により変遷し、2017年に水都大阪コンソーシアムが設立された。



2. 水都大阪のこれまでの取組み(2021年~2025年)

水都大阪ビジョン(2020年策定)

世界に類をみない第一級の水都の創造とともに、
住まう人・携わる人・訪れる人を笑顔に

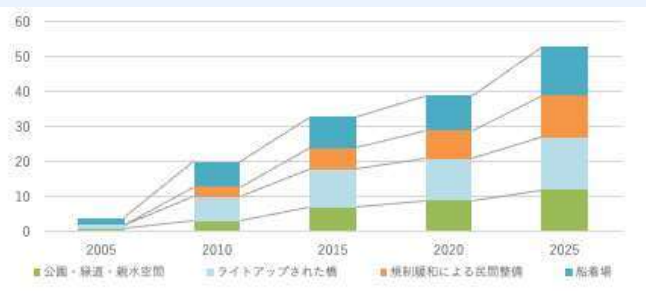
- ・歴史と文化に培われた水都大阪を次世代につなぐ
- ・世界の多くの人々が水都といえば大阪を思い起こす魅力あるにぎわい空間の創出
- ・安全・安心で環境と共生する持続可能な水都大阪の確立

2021年~2025年の取組みの成果

コロナ禍によるダメージを受けながらも、大阪・関西万博に向けた機運の高まりとともに水都大阪ビジョンに基づいて取組みを進め、舟運や水辺のにぎわいが回復した。

●水辺の施設・設備がより充実

船着場や水辺の民間拠点、公園・緑道・親水空間など、万博を契機に公民による水辺のハード整備が進んだ。



2001年から2025年の整備箇所数
※水都大阪コンソーシアム調べ

●国内外に向けた幅広い魅力発信

水辺のにぎわい創出に加え、多言語に対応した情報発信、多世代に向けた魅力発信、水辺関係者とのネットワーク構築が進んだ。



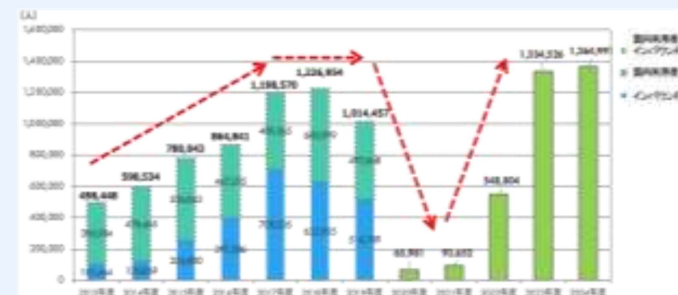
海外メディア向け
ナイトクルーズ



水上ミニ花火

●コロナ禍を乗り越えて舟運利用が回復・増加

大阪の舟運利用者数は、コロナ前を超越して回復し、増加。



2013年度から2024年度の舟運利用者数
※水都大阪コンソーシアム調べ

3. 水都大阪ビジョン2030(方向性)

- 水都大阪再生の第3フェーズとして、水都大阪ビジョン(2021年～2025年)の大きな方向性は継承しつつ、大阪IRやなにわ筋線の開業など、新たな動きを契機とした次のフェーズでの飛躍に向けて基盤の充実を図る期間
- 万博レガシーを受け継ぎ、歴史文化に培われた大阪の独自性をより強く打ち出すことで、次の時代の付加価値を創出
- 水辺関係者とのネットワークをさらに強化し、継続的に活動できる仕組みを構築
- 持続可能な観光スタイルを踏まえた、安全・安心な水辺環境の維持向上

水都大阪ビジョン2030

持続可能な共創の水辺 水都大阪

持続可能な共創の水辺 水都大阪

大阪は、古代から続く水の都。

まちの人々の力で創り、受け継がれてきた水辺の歴史文化は、喪失期を経て、
公民連携の力によって現在に再生された。

水辺は人間一人ひとりの可能性を最大限に引き出し、よりよい未来を創造する場所。
2025年大阪・関西万博の理念を継承し、
多様な文化や考えを受容・尊重する共創の舞台とすることで、
ユニークなチャレンジが次々と生まれ、水と光の首都大阪にふさわしい価値を醸成していく。

水都大阪がこれまで育んできた「歴史文化」「魅力」「環境」の持続可能性を高め、
将来にわたって市民の誇りと世界の憧れとなる水都大阪に向けて、
私たちみんなで歩いていく。

4. ミッション

ビジョン

持続可能な共創の水辺 水都大阪

ミッション

ミッション I 歴史文化を受け継ぐ

まちの人々が共創し水辺の発展を支えてきた歴史を
継承することによってシビックプライドを醸成する

ミッション II 水都大阪ならではの魅力向上

大阪の独自性や万博レガシー等を活用して
水辺を魅力アップし水都大阪のブランドを高める

ミッション III 安全で快適な水辺環境づくり

築き上げてきた安全・安心と環境を維持向上し
水都大阪のブランドを支える

3つのミッションの実行によってビジョンの実現につなげる

4. ミッション I 歴史文化を受け継ぐ

古代、大阪は国際交易港・難波津を経て、なにわ八十島と呼ばれた。
 近世には、なにわ八百八橋と表され、たくさんの橋が架けられた。
 江戸幕府が整備・管理する公儀橋が少ない中、
 まちの人々が費用を負担し橋を架ける町橋文化も花開いた。
 橋だけでなく中之島の中央公会堂や大阪城の再建など、
 水辺にはまちの人々の寄付によってできた施設が多く、
 水辺はつねに文化の交流地としてにぎわい、
 まちの人々が自らの手で創り上げた水辺との暮らしがあった。

戦後、一度失われた「水辺とまちとのつながり」は見直され、
 川に背を向けていた建物が再び水辺に表を向けるようになり、
 水の回廊を中心に水辺が再生されてきた。

私たちは、これまで水都大阪が築いてきた
 人や活動、空間や基盤、制度や仕組みを活かしながら、
 水辺とまちの主体的な関わりを育み、
 市民・企業・行政が一体となってシビックプライドを次世代へつないでいく。

水都大阪ならではのポイント

- 大阪の水辺は古くから交易や文化の拠点として外に開かれてきたことから、町人文化や商いと深く結びついて発展し、まちの人々にも外部の人を受け入れる、人の距離感の近さがある
- 水辺には時代ごとの人々の手によって公共的な空間が造られ、様々なチャレンジが集まり、まちの活力・魅力として集積してきた
- かつて川だったことを連想させる地名や、古くは川沿いの建物が川側を向いていた痕跡、水辺にある水防碑やモニュメントなど、水辺との密接な関わりの歴史を感じられる場所がまちなかの随所にある



まちなかに縦横に流れる川にはたくさんの橋が架けられていた
 改正増補國寶大阪全圖(1863年)
 出典:筑波大学附属図書館デジタルコレクション



川沿いのお店が仮設テラスを設置したことをきっかけに、
 地元組織を設立、規制緩和につながった
 現在のおしゃれエリア・北浜テラス

4. ミッション I 歴史文化を受け継ぐ

これまでの成果

- 公民連携による水辺の拠点整備や維持管理の実現(とんぼりリバーウォーク・はちけんや・中之島バンクス・タグボート大正・β本町橋など)
- 市民活動の高まりと活動組織の立ち上げ(北浜テラス協議会・東横堀川水辺再生協議会など)
- 舟運事業者の増加と舟運関連団体の主体的な活動(大阪シティクルーズ推進協議会・NPO大阪水上安全協会)
- 水都大阪の魅力を次世代へ啓発・発信(水都大阪アカデミア、大川さくらクルーズ小学生無料乗船企画)
- 水辺関係者のネットワーク構築(水辺を語る会の実施、企業・団体等へのメルマガ配信)



β本町橋



水辺を語る会

現状の課題

- 多様な主体をつないで公民連携を促進する仕掛けづくり
- ユニークな人を惹きつけ、水辺での新しい活動を生むオープンな場づくり
- 水都大阪のノウハウやネットワークの蓄積と継承
- 水辺の利活用を促進する仕組みづくり
- 次世代の水都大阪のまちづくりの検討

アクションの方向性

魅力的な水辺を継承する公民連携や企業・市民参加の促進

水都大阪ならではの多様な魅力を継承するため、公民連携を活かしたプラットフォーム機能を強化し、企業や市民の水辺のまちづくりへの参加促進へつなげる。

4. ミッション II 水都大阪ならではの魅力向上

水都大阪の個性の源泉は、市域面積の10%にのぼる水面と、特徴的な地形。都心部を口の字に流れる川の水辺には、緑と光が彩られ、市民が親しめる空間が形成されてきた。

大阪城、ユニバーサル・スタジオ・ジャパン(USJ)、道頓堀など、世界から多くの観光客が訪れるエリアはもちろん、全国に先駆けて市民と行政が共に創りあげてきた水辺の個性的なエリア、今後の開発に注目が集まるベイエリアなど大阪の魅力的なエリアは川でつながっている。また万博を契機として、水と光のウォーターショーや橋梁等のライトアップ、市内中心部とベイエリアを結ぶ新たな航路開発など、水と光による新たな魅力が創出された。

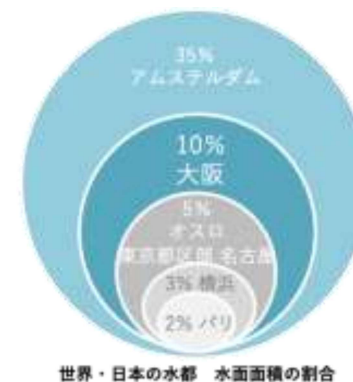
これらの魅力を船でつなぎ、質の高い水辺の楽しみ方を生み出し、磨きをかけることで、水都大阪ならではの価値を醸成し、「水都といえば大阪」と思い起こすブランドを確立する。

水都大阪ならではのポイント

- 市域における水面面積割合が10%と高く、市内には魅力の異なる河川が口の字に流れており、世界的に珍しい特徴的な地形である
- 2024年度では国内の宿泊施設稼働率 第1位、外国人宿泊者数 第2位と国内屈指の観光都市であり、大阪を代表する観光スポット大阪城・USJ・道頓堀などをつなぐように川が流れ、多彩な魅力のあるエリアが高密度に集積している
- 古くから人々の暮らしと水辺が密接に結びついているため、観光的な景観の美しさだけでなく、暮らしが表れた水辺が形成されている



大阪市面積と市内の水面面積の比較
出典:大阪ブランドコミッティ



※市域面積が大阪と同程度(約500km²前後)の都市を比較



都市部の中に水辺と緑が広がる大阪・中之島

4. ミッション II 水都大阪ならではの魅力向上

これまでの成果

- 四季の風物詩の定着(大川さくらクルーズ、OSAKA天の川伝説、大阪・光の饗宴など)
- 水都大阪のシンボル空間の形成(世界から観光客が集まる道頓堀、ライトアップが魅力的な中之島)
- 船着場や遊歩道の整備による水辺の回遊性向上の進展
- 万博航路の開拓など大阪・関西万博のレガシー

現状の課題

- 船着場・水辺拠点とその周辺エリアの回遊性向上
- 万博レガシーの積極的な活用
- 「水都といえば大阪」の認知度向上とブランディング
- 過密化する観光エリアや観光シーズンへの対応
- インバウンドを含めた来街者がクルーズにアクセスしやすい環境づくり



天神橋TORCH 2023



OSAKAリバーファンタジー



中之島GATEサウスピア

アクションの方向性

川とまちの特性を活かした ブランドの確立と魅力づくりの推進

大阪のまちの魅力を生かして、舟運と水辺の拠点との連携を促進し、エリアごとに磨きをかけて水都大阪のブランド確立を目指すとともに、国内外に届くプロモーションを展開する。

4. ミッション III 安全で快適な水辺環境づくり

水害との度重なる戦いのなかで防災の知恵と技術が積み重ねられてきた水都大阪。水門や護岸、下水道などのインフラ整備も全国に先駆けて進め、安全な都市をつくりあげてきた。高度経済成長期に悪化していた水質も、21世紀を迎えるころには改善。それとともに舟運も復活し、現在では多様な船が行き交う姿が水都大阪の日常的な景色となっている。

世界的に気候変動への対応が急務になるなか、大阪でも2020年までの過去30年間で海面は13cm上昇。2050年までの30年間で、さらに27cm上昇する予測となっており※、世界平均よりも海面上昇の予測幅が大きくなっている。

当たり前となった安全安心な水辺環境をしっかりと次世代に受け継ぎながら、より市民にとって居心地よく、訪れる人にとっても魅力となるよう、水・緑など自然を感じる水辺のブランドを公民連携で築いていく。

※国際連合報告書『温暖化する世界と海面上昇(Surging seas in a warming world)』より

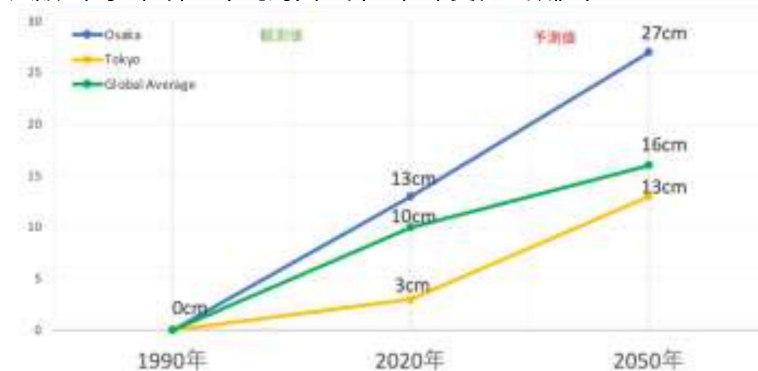
水都大阪ならではのポイント

- 豊臣秀吉時代に整備され始めた「太閤下水」を維持更新し、現在でも一部現役で稼働していたり、内水浸水や外水氾濫、高潮・津波対策など総合的な治水対策に早期から取り組み、安全安心で健康に水とともに暮らすための持続的な都市基盤を受け継いできた
- 市域の水面面積が10%あり、海から街中まで東西に川が流れて風が抜けることから、都市部のヒートアイランドを緩和する地形となっている
- 舟運事業者等による自主的な航行ルールの策定や、清掃船の運行、人力船による水上のごみ拾いツアーの実施など、民間の主体的な水辺の安全・環境を守る活動がある



国内では珍しいアーチ型の3つの水門により高潮・津波から市内が守られている西大阪地域の高潮対策
出典：大阪府

大阪・東京・世界の平均海面上昇の経年変化と数値(1990-2050)



※出典：2020年以降の予測データ（現在の気候変動による気候変動シナリオ）
データ元：国連報告書「温暖化する世界と海面上昇」(NASA SLCT, IPCC AR6のデータに基づく)



船が行き交い
人々が憩う
八軒家浜・中之島

4. ミッション III 安全で快適な水辺環境づくり

これまでの成果

- 3大水門や防潮堤の整備など高潮・津波対策による安全確保
- 河川水上交通の安全と振興に関する協議会における全国初の自主的航行ルール策定と随時更新
- 民間による積極的な環境美化活動と公共事業による水質浄化、それにとまなう環境改善(悪臭の改善、生き物の生息)



大阪市内河川の水上航行ルールリーフレット
(令和7年2月版)



道頓堀川で捕獲されたニホンウナギ
出典:大阪市HP

現状の課題

- 水辺の安全や魅力を守る既存施設や設備についての計画的な修繕・更新
- 船舶の過密に対応した一歩進んだ安全対策
- ゼロエミッション、サーキュラー・エコノミーなど新しい時代に向けた持続可能性へのチャレンジ
- 気候変動への対応(ヒートアイランド対策としての水辺の緑、海面上昇による橋をくぐる航行機会の減少)



アクションの方向性

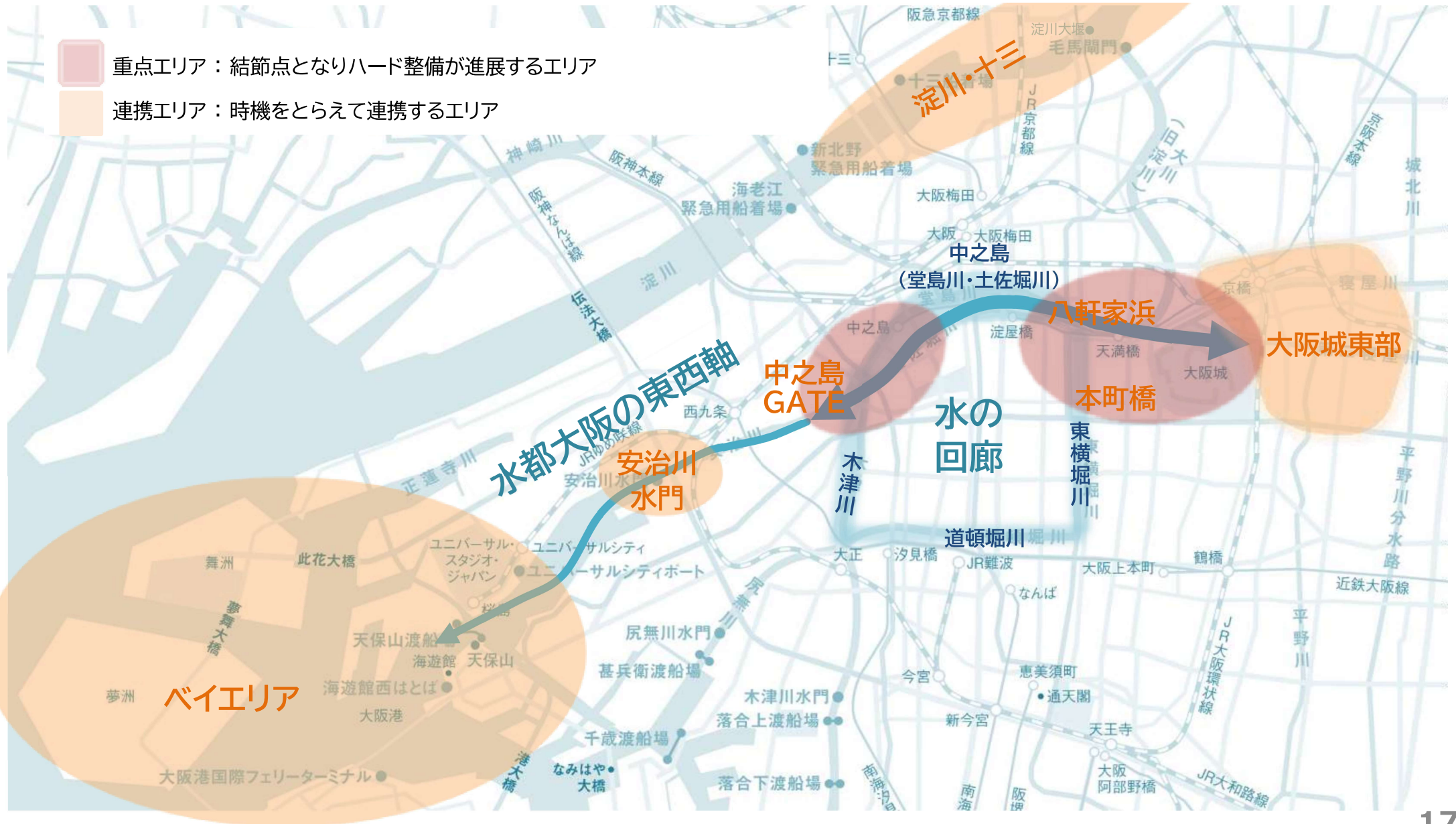
水都大阪の基盤となる環境価値を守り育てる 仕掛け・仕組みづくり

安全安心に裏付けられた水都大阪の魅力を持続・発展させるため、その価値への共感の輪を広げる仕掛けや、守り育てる仕組みづくりを展開する。

5. 取組みの範囲

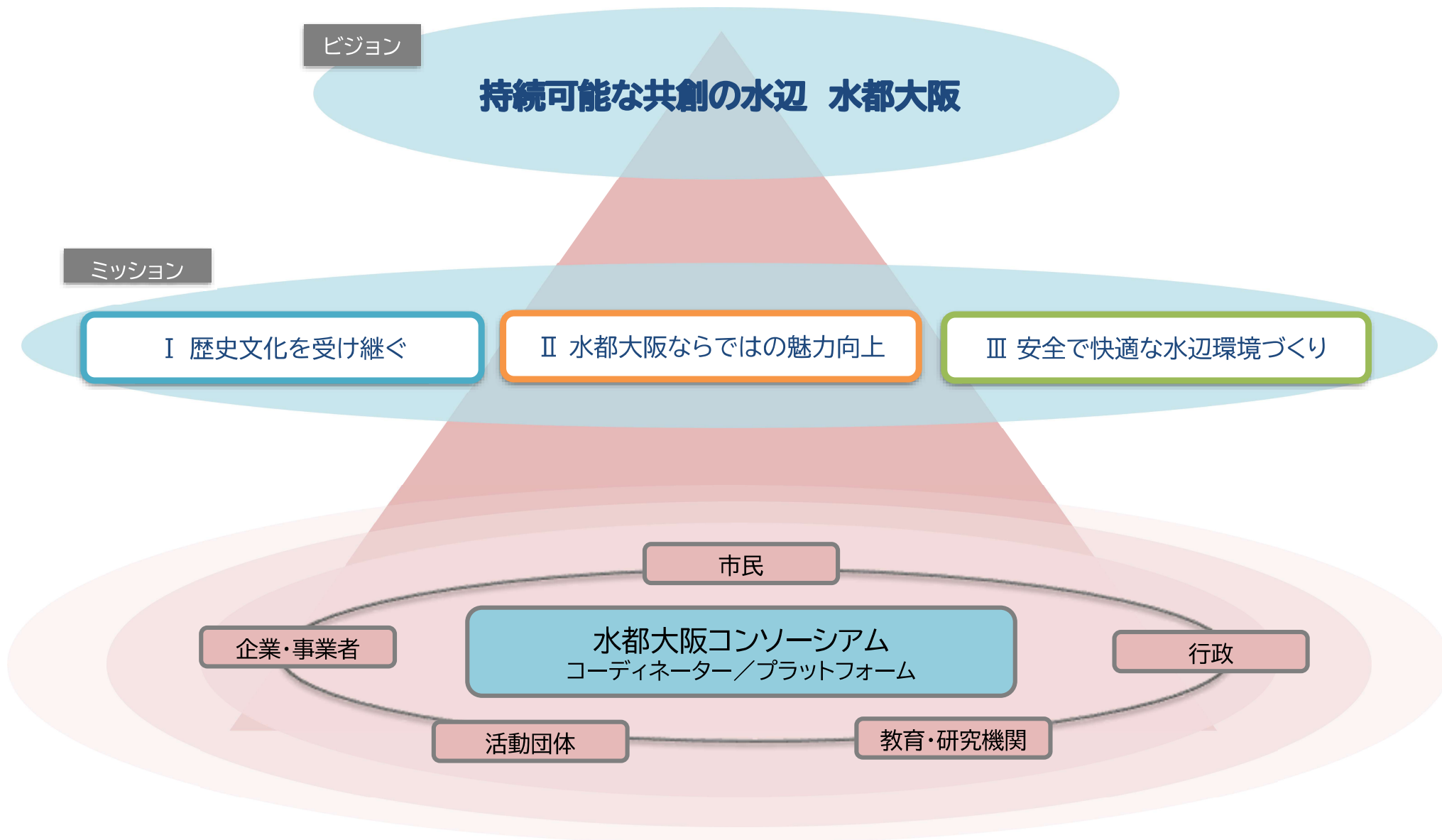
- これまで通り水の回廊を中心としながら、東西軸と水の回廊の結節点を「重点エリア」として取組む。また、開発が進むベイエリアや大阪城東部、淀川・十三との連携も図る。

-  重点エリア：結節点となりハード整備が進展するエリア
-  連携エリア：時機をとらえて連携するエリア



6. 水都大阪の推進体制 ①全体像

- 公共と民間がそれぞれ得意とする部分を役割分担して取り組むと共に、公民連携で取り組む内容については、水都大阪コンソーシアムがプラットフォーム機能を担い、オール大阪で実現を目指す。



6. 水都大阪の推進体制 ②水都大阪コンソーシアムの5カ年のあり方

- 期間:2026年度から2030年度までの5か年
- SOCは2017年の設立以降、水都大阪でのにぎわいイベントを主体的に実施するなど、魅力づくりの面で寄与してきた。2026～2030年では、これまで育まれた関係主体の「連携」から「共創」させていくことをねらうとともに、にぎわい創出は「主体」から「支援」へ、ブランディングは「認知」から「深化」へと移行し、2031年度以降の次のステップにつなげる。

